マタンプシ（はちまき）にアイヌ文様の刺繍をするアシリ・レラさん。（2000年7月7日）

父親の広野洋さん（右）と共に大好きなエムシ　リムセ（剣の舞）を踊る大地くん。（２００８年６月８日）

■宇井眞紀子写真展■
『アイヌときどき日本人Ⅱ』5月11日～19日、コニカミノルタプラザギャラリーC

「アイヌ」をテーマに撮り続ける

写真家　宇井眞紀子さん

武蔵野美術大学視覚伝達デザイン学科2年の必修授業で写真に出合った。「それまではフィルムの入れ方もわからなかったんですよ」と宇井眞紀子さん（49）は笑う。中学、高校時代はバレーボールに熱中し、高校では強豪校のレギュラー選手だった。そんな宇井さんが、写真の魅力にはまった。授業の課題はただひたすら街に出て、人に声をかけ、写真を撮らせてもらうことだった。現場に行かなければ撮れない「一瞬を切りとる」という写真の性質が性に合ったから、だという。

「グラフィックデザインよりも写真ダー！」という思いが、その後、フリーの報道写真家、樋口健二氏を知り確定的なものになった。「この人に学びたい」と、卒業後は日本写真芸術専門学校へ進み、厳しいことで有名な樋口氏のゼミを選択。そして、プロの道をまっしぐら…とは人生いかなかった。ともに写真を学ぶ同級生と24歳の時に結婚、翌年女の子を出産。「子育てを一所懸命やって、40歳くらいで仕事を再開できればいい」と思っていたが…娘が幼稚園に通う頃離婚した。

フリーランスで雑誌を中心に仕事をしながらの子育て。「私の母や、保育園の先生、おかあさんたち、いろんな人たちに助けてもらいました」シングルマザーとしての苦労も、サラリとにこやかに語る宇井さんだ。

ライフワークとしてアイヌの人々を撮り続ける

「アイヌ民族」を撮りはじめて18年になる。最初にアイヌに興味を持ったのは小学生の時だったが、1992年のこと、雑誌で北海道日高地方二風谷（にぶたに）に住むアシリ・レラさんというアイヌ女性の寄稿文を読んだ。アイヌの聖地とされる二風谷は一度行ってみたいと思っていた場所だったから、急いで手紙を出したら、「すぐにおいで。泊まる所も心配しなくていい」という返事。即実行の宇井さんであった。

アシリ・レラさんは事情があって親と暮らせない子どもたちを引き取り、アイヌの言葉や文化を学ぶアイヌ語学校を主宰。チセと呼ばれる伝統的な茅葺の家を大切に守り、さまざまな活動をしている肝っ玉かあさんだった。普通の生活の中に、アイヌ民族の精神が生きている所に、娘の莉央さんを連れて、毎年滞在するようになった。多いときには年に10回も。

「それまでアイヌ民族について、いかに知らなかったか、思い知らされましたね。そしてアイヌ民族を侵略した側の和人として、カメラマンとしてどう関わっていくべきか、手探りのまま通い続けるうちに、ライフワークとしてアイヌ民族を撮り続けようと決めたのです」

その後、首都圏にも約5千人のアイヌ民族が暮らしているのを知った。「知りたい」ことが宇井さんを突き動かす。それ以来関東周辺のアイヌの人々を「おっかけ」、自宅にまで押しかけて取材させてもらった。

こうしてまとめたものを写真集『アイヌときどき日本人』（社会評論社）として2001年に出版。昨年は増補改訂版としてリニューアル出版した。全頁モノクロで、伝統的なアイヌの結婚式の様子から始まり、日々の暮らし、神への祈りや踊りなど、アイヌの人々の姿をありのままに伝えている。宇井さんの温かい眼差しが感じられる写真集だ。

「森羅万象にカムイ（神）が宿ると信じ、あらゆるものに感謝するアイヌの精神が好きです。これからもずっと記録していくのが私の役割だと思いますので、私の写真をきっかけに日本の先住民族『アイヌ』に関心を持っていただけたらうれしい」

この春に『アイヌ、風の肖像（仮題）』（新泉社）を出版予定。

（東村山市在住）